〔研究ノート〕

ロマン・インガルデンの『文芸作品論』について（III）

西沢　孝

I
1. 概　要
2. 多層的構造体としての文学作品
3. その図式性と潜在性　（以上，第13巻第1・2号）
II
1. その直観性と情景の層
2. 資料「芸術的価値と美的価値」（翻訳）
（以上，第13巻第4号）
III　純粋志向的対象としての文学作品と
その虚構性　（以上，本号）

III　純粋志向的対象としての文学作品とその虚構性

1.

一般に読者が注目するのは，作品に描き出された対象である。作中人物について，その「現実」について，あれこれ話題にしている。先に，それを「宙に浮かんだ言語の館」と形容しておいた。例えば，現実の出来事について報道する新聞記事に比べて，文学作品の対象とその世界の「宙に浮かん

だ」在り方については後ほど述べることにするが，インガルデンにしたがって，その虚構性を問題にするうえでも「言語の館」という対象の存在が認められなくてはならない。「ファウスト」という人物はかつて実在したと言われている。「同じ」人物がゲーテのイメージとしても存在したであろう。またその作品を読んでいる読者のなかにも存在することになるが，在り方は別として，作品に，つまり文章で描出されたファウストが存在するかどうかである。これも基本的な問題であるが，明確な解答は出されてはいない。インガルデンはその序文において，「それ自身のうちで純粋に，その自発性の源泉から創造された」主観的形象が「実在的なものと見なされる文化的世界において，諸々の学問や理論のように，いかにして時空的に拘束された現存在，歴史的時間形式における現存在をとることができるのか」というフッサールの「厄介な問題」が本書の出発点にあったと記している（XV）。ゲーテの主観的形象であったファウストが現存在をとりうるのは，言語の意味のはたらきであり，「言語の館」と言いうるかどうかは意味をどう捉えるかにかかっている。そこでここでは，インガルデンの言語の意味の理解を辿ることにする。

作品に，描かれた対象が存在すること，そしてそれが，対応し関係づけられる実在する対象とも，具体的な作者や読者の心象とも別様の在り方をしていることは，絵画や映像においては自明のことがらである。カンヴァスに描かれた「館」を，たとえそれが忠実に模写されたもので，いかに実物に類似していても，模写された建物と同一視するひとはあるまい。実在する建物が焼失しても，カンヴァスの「館」はそれと共に変化せず，そこで炎上し続けていると言ってよいだろう。当然のことながら，炎上していると言っても，真に実在する時空のなかに炎上しているのでもない。このことは，ある事件の実況を伝えるニュースの映像でも同様である。現実そのものとしばしば同一視されることがあっても，両者は別の対象である。それも客観的実在性を欠いた「仮象」であり，実在性を装っているにすぎない。絵に画いた餅は食

べられないのである。またこの「館」が作者の心象風景を描いたものでも，具体的で主観的な作者のイメージそのものと同一視するひとはいないだろう。描かれた風景は作者が亡くなっても存続しているが，主観的なイメージは意識作用に直接関係しており，作者と共に消滅したはずである。さらにこれを観照者や視聴者の単なる主観的な心的内容と見なすひともいないだろう。見る者がいないとき，存在しないも同然で，なんらの作用も及ぼすことはないが，「私」が見なくても，この「館」は存在し，目を閉じることで対象の存在を否定することはできない。そこにカンヴァスと色彩を物的基盤として存立する「客観的」な対象を認めることができる。もとよりカンヴァスの物質的変化は，そこに描かれている「館」に多大な影響を及ぼすが，カンヴァスそのものは，この「館」の柱や壁を形成する「物質」ではない。われわれに実在物として与えられているのは，カンヴァスと色彩であるが，われわれが注目しているのは実在する物質とは異なる形象であり，この「館」は物質的基盤を超えたところに位置し存立している。

こうしたことがらは，そのまま文学作品に，また新聞記事にも妥当するように思える。いずれも文章から成り立っていることにちがいはない。文章に述べられたことも，書物の紙とインクの物質的組成を調べたところで明らかになるものではない。物質とは別様の在り方で存在している。また「ハンス・カストルプ」という小説の主人公は，そもそも実在しない虚構の人物であるが，作品には登場してくる。虚構の人物でなくても，歴史小説に描かれた実在した人物も，作品のなかではいつも若々しい現在形の姿で活躍していることが起りうる。しかも作品に存在するとすれば，書物の冊数だけ存在し，いずれも同一の人物であると言えるだろう。こうしたことは実在する対象にはありえないことである。新聞記事においても，文章に述べられたことは，報道された現実の事象が過ぎ去っても，それと関わりなく存在し続ける。それが誤報であったときには，一層明白に誤報の現実がそこに浮かび上がるだろう。誤報の描き出す事態は文章に描かれたことにすぎず，実在する

客観的事態にはなりえない。とすれば，いずれも言語を土台とする「言語の館」と見なしてよいだろうか。だが，ことはそう簡単ではなさそうだ。というのは，一冊の書物を前にしても，新聞の紙面にも，絵画のように直接感覚に訴える「客観的」な対象を見い出しえないからで，そこに対象の存立を認めない論者も多い。

文章に述べられていることは，そのまま実在する対象になりえないにしても，作者や読者の具体的で主観的な意識内容として存在するという見解が生れよう。もしそうならば，作者の想像の産物である虚構の対象も，また誤報で伝えられる事態も実在する世界に存在しえなくても，意識内容としてならば存在しうる。そして事実を報告したことでも，それに対応する現実の事象が変様しても，そこに変らずに存続しうると考えられる。ところが，それを作者の主観的な意識内容とすることには無理があろう。先に述べたとおり，物故した作者の意識内容そのものは，作者と共に消滅したはずで，それを取り戻すすべはない。とすれば，ゲーテの「ファウスト」は読者の意識や思考内容として存在することになるだろう。そして作者の遺したものは単なる文字記号だけということになろう。言語の意味を主観的な心的作用と捉えるなら，そのとおり作品に存在するのは文字記号だけとなる。意味をもたない文字記号とは単なる物質にすぎず，それを文学作品と言えるかどうかは疑問であるが，このかなり一般的な，意味の心理主義的見解によれば，「記号」は社会的慣習や偶然的な連想によって，一定の心的作用と結びついており，一定の意識内容を喚起するという。そしてこの意識内容がその「記号」の意味内容とされている（例えば『哲学事典』〔平凡社〕の意味論の項を参照）。だがこの見解にしたがうとき，言語による伝達はどのように行われるのだろうか。言語の意味とされる意識内容は具体的で，その都度の心的体験に左右される。また厳密に見れば，個々人によって異なる「私」的なものである。この主観的な意識内容はそれを体験する当の本人にしか近づきえないとすれば，この考え方では，例えば話し相手がその音声（あるいは文字記号）にどのような

意味をこめているのか，どのような意味でその音声を用いているのか，それを理解するには，類似していると想定されている自らの意識内容をもとにして，相手の意識や思考内容を「類推」することになる。しかし類似しているだけでは，相手の用いている語の意味の正確な理解はおぼつかない。ましてすでに物故している作者の意識内容を，言語が意味をもたないとすると，どのようにして正確な理解に達することができるのだろうか。そのとき文学作品の理解は個々の読者によって異なってこよう。これは文学作品に限らず，文章から成り立つ憲法においても同様で，その正確な理解は果せないことになる。しかしわれわれは，憲法の条文を読みながら，すでにない起草者の主観的な意識内容をいちいち忖度するだろうか。たしかに起草者の主観的な意図を類推すること，また起草された思想的背景をさぐることはあろう。だがそれは条文をよりよく理解するためであり，主観的な意図を類推するのも，条文の内容を通してである。また日常の会話においても，この考え方は事実に即していない。目の前にしている現実の事象について「私」が相手に話をするとき，二人は「私」が文章で表現したことを通して，この外的な事象に注意を向けており，双方の思考内容や意識内容に関心を払うことはない。「私」が述べたことが，現実の事象と合致しないときには，相手はその事象を指摘しながら「私」の認識を正すだろう。

「私」が述べたことは，現実の事象の認識や思考をもとにして，文章を作成するという意識作用から生れた主観的な産物である。加えて，成立のみならず存立においても，その言語を知らない者にとっては，あるいは人間の読み理解するという意識作用なしには存在しえない主観的な対象であるにちがいない。しかし，文章に表現されたことは，作者や話し手の主観的領野を離れて，その具体的な意識作用との直接的な結びつきを断ち，それとは独立している。日常会話の音声は瞬時に消えるとしても，記録として作品として文字記号という比較的持続しうる物的基盤に支えられるとき，「私」の単なる主観的対象ではなく，複数の読者が関わり合うことができる「共同主観的」

な対象となろう。

2.

これで「言語の館」の存立が確認されたとは言えない。現実の認識であれ，全くの想像の産物であれ，この主観的な対象が複数の人間が関わり合える，しかも同一の共同主観的存在になりうるのは，実在する物的基盤だけでなく，なによりも言語の意味のはたらきによる。文章に「述べられる」とか「表現される」とは文章の意味の機能に他ならない。だが意味とは「厄介な問題」である。言語が意味をもつことを容認しても，意味される対象はなおかつ読者や聞き手の心象という見解は成り立ち，あえて「言語の館」の存立を認める必要はあるのかという疑念もあろう。また流動する物質を指して「水」と表現するとき，その音声的表現は実在する物質を意味するという機制も成り立っている。これから述べるインガルデンの見解は実体論として批判を下すこともできるが，言語の意味が関わる両者との関係を説明しうる仮説と見なせよう。

さて，一般に語は意味をもっていると言われる。辞書には，その国語を用いる人間に共通する意味が記載されている。語の実際の使用において，個々人の体験に応じて様々な意味がこめられて，それぞれ異なることはあるが，その核心においてわれわれは同一のものとして語を用いている。インガルデンは意味を「それ自身とは異なる何ものかを自らを超えて指示する作用」と捉えて，意味される対象と区別している。そして語義（および文章の意味）を意識作用によって「賦与された志向性」あるいは「派生した志向性」と捉え（S. 104），それを外から支える，あるいはその外皮となる語音と結合し，共にその語を形成すると言う。語音は（すでに層構造のところで述べたように意味と結合した典型的な音声形態として単なる音の集合ではないが）自らを超えて何かを指示することができないとすれば，この機能を外から課せられ与えられなくてはならない。こうした意味賦与は新しい語を作成する際に

見られる。例えば，まだ命名されていない新たな対象を発見したとき，科学者は新たな語音を見い出して，それに新たな意味を与えて，その対象を指示する語を作る。とはいえ，他者との関わりもなく，全く個人的に「私」的に新語を作るわけではない。どんな語の形成あるいは意味賦与も，同一の対象を認識しているとか，共有する状況のなかにいる複数の人間が，その対象を同一の意味と語音をもった語で確定しようとする共同作業である。そしてなによりも，すでに存在している語音と意味の面での差異性にもとづいて，つまり共有する国語という言語体系のなかで行われている。もとより新語を作成することはごく稀なことであり，通常はすでに意味が賦与されている既成語で用は足りる。語は単なる主観的なものでなく，共同主観的な意味を備えて，われわれの前に用意されている。

例えば，うす紫の花を穂状につける植物を誰かが「ヘリオトロープ」（Heliotrop）と名づけたのであろう。それは「ヒマワリ」という音声形態であってもさしつかえはなかったが，その語音を今もわれわれは他の草花と区別して，この植物を指すのに用いている。そしてその語の意味は植物だと言われることがある。あるいは語の意味を指示機能と捉えて，この語で意味されるのは実在する植物だとされる。それで通常間違いは起らない。われわれは言語を事物につけられた符号のように用いて，その意味内実に注意を払わないからである。また語の同一性をそれに対応する実在の植物を直示して確認し合うこともある。この点は認めなくてはならない。しかしこの語に直接指示され相関する対象は実在する植物ではあるまい。「ヘリオトロープ」という二つの要素から成り立つ語は語音と共にそれ自身の意味をもっている。ある辞書には「太陽に向かって咲く花」とある。とすれば，われわれは実在する紫色の花をつける植物を「太陽に向かって咲く花」と捉えて，それを植物全体の名称にしているのである。それは同一の植物を指示するように用いられても，「紫の色」とも和名の「キダチルリソウ」とも異なっている。「ヘリオトロープ」という語は「ヘリオトロープ（太陽に向かって咲く花）」で

あって「キダチルリソウ」ではないのである。それ自身の意味とそれに意味される対象がこの語に内属している。またこのような意味と意味される対象をもつ「ヘリオトロープ」という語は植物の名称にもなるが，辞書によれば，この植物から作られる「香水」を指すことも「太陽反射器」を指示することもある。小説では比喩的に女性を暗示することもあろう。「ヘリオトロープが歩いている」という文も成り立ちそうである。普通名詞の場合でも，「木」とドイツ語の「Baum」とは語音はもとより，その意味の「外延」と「内包」において完全に一致しているものではない。それぞれの，ゆるやかとはいえ一定の言語体系のなかで，その差異性にもとづいて位置づけられており，それぞれ固有の意味をもっている。その相違は語音の面では，同音異義からの「言葉遊び」に，また意味の面でも比喩的表現においてさえ，はっきり現われてくる。同じく「木」と「樹」も別の意味をもつ語である。

名辞の最も重要なはたらきは，インガルデンによると，賦与された志向性あるいは志向的思念作用＝意味作用によって，名辞の対象を「樹立」することにある。この語に内属する対象を彼は「志向的対象」または「志向的相関者」と名づけている。ここで意識作用に内在する志向性ないしは志向的思念作用について，そしてその作用と対をなす相関者と内属するという関係について，ここで略述しておいた方がわかりやすいだろう。

『形相的存在論』のなかで（第46節），彼は意識の様々な段階に応じた対象を記述している。そこで感性的知覚の際に現われる次のような簡単な例を挙げている。

青空に浮かんだ一連の雲を眺めながら，個々の雲に様々な形姿を「思い描く」ことがある。例えばそれは入江であったり，そこに帰りつく何隻かの船である。青い海を帆走するヨットであるかもしれない。実際に見ている雲の形態から，それとは別の形姿を思い描き，そこに全く別の意味（Sinn）をこめている。その際見ているのは，もはや白く輝く雲ではなく，入江を離れ白い帆をふくらませて走るヨットである。インガルデンはこのイメージを「純

粋な」志向的対象と名づけて，たまたま意識作用が向けられたことで「二次的」に志向的対象（意識作用の相関者）となった対象と区別する。知覚されている雲は意識作用に関わりなく存在し，それによって何ひとつ変化を受けることはない。意識作用から根本的に超越している対象である。それに変化を加えるには意識作用とは別の作用が必要である。一方そこで見ているヨットは，そのとき初めて意識作用によって「創造」されたもので，この作用によってその存在を，打ち消されもする。この作用によって保持されなくては存続することもできない。またこの意識作用の相関者は何らかの規定をもっている。だが「もっている」と言っても，その「白い」は実在する対象のように，その他のすべての規定と共に真にそこに内在しているわけではない。当の意識作用によって「風をはらみ」「白い」と宛てがわれたものにすぎず，また宛てがわれた規定しかもちえない無数の「非規定箇所」を有する対象である。これを彼の存在論の術語で言えば，その存在基盤を自らのなかに有する，あるいは，その規定が完全に内在している「存在自律的」対象に対して存在とその相在（あるいはその規定）のすべてが他の対象にもとづく，したがってそれ自身では存在しえず，自ら変化しえない対象として「存在他律的」と規定される。この他律性は，感性的知覚に制約されずに，もっと自由に内発的な想像をはたらかせた場合，例えば作家が作品を構想する際に浮かぶ様々なイメージにおいても同様である。ここで「創造」と言われるものも存在自律的対象の真の創造ではない。ここに現象する対象は幻想であり，子供っぽい空想の産物であるかもしれない。存在自律性という点では無に等しい「仮象」にすぎない。しかし意識の相関者として全くの「無」とも言えまい。しかも「海を帆走するヨット」は単に思い描かれるだけでなく，白い現実の雲と青い空で体験されている直観的内容によって充実されるならば，生々と眼前に現われてくるもうひとつの「現実」である。そのように見ているのが子供なら，そのヨットを欲しいと叫ぶこともあろう。

ところで，意識作用に内在して，こうした「創造」を行わせる思念作用な

いしは志向性のなかに，インガルデンは三つの契機を見い出している（S. 194 ff.）。意識とは，よく言われるように何かに「ついて」の意識である。その作用は現実の雲に向かうこともあれば，雲から思い描かれたヨットに向かうこともある。思い描かれたヨットに向かうとき，現実の雲は意識から消えている。（とはいえ現実の雲が存在していないわけではない。逆の場合にヨットが存在しえないことは，その存在他律性を示している。）ある対象との意識の関係あるいはそれを指示し関係づけるものが「志向契機」である。この契機と統一的全体を成し，それに意味（Sinn）を与えるもの，つまり志向契機に方向づけを与え，指示される対象がどのような対象であるのか，それに質料的形相的規定を与えるのが第二の契機，思念の「非直観的内容」である。これらに加えて，その対象が存在するとすれば，実在するのか理念的存在なのか，あるいは架空のものなのかを示す実在把握（ここでは実在する事象として），さらにその存在は肯定的か否定的か，あるいは仮定的か等々を決定する存在の性格づけの契機が抽出されている。なおインガルデンが分析しているところでは，意識作用そのものに含まれているのは，この三つの契機から構成される純粋な思念（志向）だけではない。ときには，この志向なり思念作用を外側から包むように，願望や愛憎，意志などの契機がはたらくこともある。子供の思い描く「ヨット」には何らかの感情や情緒，それを欲しいという意志も賦与されていると見てよいだろう。

この情動的色彩は別として，純粋な志向的思念作用によって「創造」された対象は，志向契機によって意識作用から，したがって意識主体から一応切り離されている。作用の相関者としての対象は作用の外部にあるものとして，ある種の隔たりをもって，まさにそれに「ついて」意識主体によって思念され捉えられる。言い換えると，思念された対象は意識作用そのものを構成する実的契機には属さずに，作用そのものに対してもうひとつの統一的全体を成すことになる。インガルデンはこれを「構造的超越」として，先に述べた実在する対象の意識作用に対する「根本的超越」と区別して用いている

(S. 224)。またそれ自身で統一的全体を成す対象は，意識作用に依存しながら，それに対して存在独立的とも規定される。このことから，ひとつのイメージが個々の具体的意識作用によって同一のものとして思い描かれることになる。

この対象は，われわれの想像が具体的な感性的知覚に刺戟され影響を受けようとも，またその規定が現に知覚されているものの内容に依存していようと，この具体的体験の経過と体験されているものを超え出ており，知覚されている空間とは別の，常に思念にともなう薄暗い背景から浮かび上がってくる。それだけでなく，それ自身の時間と空間，いわばその「現実」をもちうる。だが純粋な思念の「非直観的内容」は，それだけでは単に「思い描かれる」だけで，生々と目に見えるような現実として現象しないことを示している。そのように現前化するには，この作用の外で体験された，つまり感官で感受された直観的内容で「充実」されなくてはならない。現実の白い雲と青い空から思い描かれた「海を帆走するヨット」はその子供によって意味充実されて生々と「見て」とられよう。このように想像されるのが普通であるが，論理的対象のように純粋な思念でこと足りる場合もある。ただし，情動的要素は不要でも，具体的思考には常にそうした要素や雑念がつきまとっている。

以上のことから，純粋な思念作用を構成して統一体を成している三つの契機は，先に文学作品の意味層のところで述べた語義の要素，すなわち語義の志向的方向要因，質料および形相的内容，実存的性格づけの契機にそのまま相応しているのがわかる。そこからインガルデンの見解は意識作用の分析を言語の作用に適用した，やはり心理主義ではないかという批判も聞こえてきそうである。同じ意識作用に内属し依存関係にありながらも，志向作用と志向的相関者との構造的超越も，文学作品の言語層と対象層という層的把握に関連している。さらに純粋思念作用の非直観的内容と情動的内容との区別は，いわば上部構造における対象とそれに直観性や情動的性格を与える情景

の層との識別と結びつけられる。もっとも，すでに述べたように非直観的対象にそうした特徴を準備する情景の層は言語的表現から生ずるもので，自ずから意識作用のそれとは異なっている。

ともあれ語義，つまり賦与された志向性によって「樹立」される，あるいは語に内属する対象は究極的には本源的な意識作用にその存在を依存しているが，直接的には語義に存在基盤をもとめており，具体的実在的意識作用に対して相対的独立性を保っている。しかし存在他律性という点では意識作用に直接相関するイメージと同様である。実在する対象のように，すべての面で規定されてはいない，質的規定が真にそこに内在してもいない。宛てがわれた規定しかもちえず，それ自体で存在することも，変化することもできない対象である。インガルデンは意識作用に相関する本源的な対象と区別して，これを「派生的な」純粋志向的対象と名づける。語が意味をもち，こうした対象を内属させているとすれば，この言語の「館」とは別に，それに対応する実存する個物の「館」があり，具体的で実在的な意識作用に相関する「館」のイメージが存在しよう。さらにインガルデンにおいては，理念的対象としての「館」も構想されており，語義の同一性の根拠として援用されているが，ここではあえて触れないことにした。ただし，語がすべて，こうした純粋志向的対象を命名し「樹立」するわけではない。そうした語には，繋辞や「そして」「あるいは」といった接続詞，また「あの」という指示代名詞，さらに前置詞も含まれよう。これらの語は，それと共に用いられる他の語の意味との関連，それらが結びつける対象との関連などにおいて様々な機能を果すところから，機能語あるいは機能小辞と分類される。二つの名詞や文を結びつける接続詞は，より高次な意味統一を実現し，その名詞の対象の志向的共属性を生み出す。

3.

われわれは自らの国語を用いなければならない。それぞれの語がすでに賦

与された意味を備えているとすれば，認識や思考はこの共同主観的に成立している意味に制約されており，そこから完全には自由になれない。さらに認識の成果を対象化し，他者に伝達するためには，全体的構想のなかで，個々の文を作成する。その際，語に含まれる意味を顕在化することになるが，「館」でも「家」という語においても，意味しようとする思考内容よりも多くのこと，余計のことを意味してしまうこと，逆に十全に表現しうる語を見い出しえないこともある。ところで，あらかじめ共同主観的に存在しているのは語義だけではない。文法も人間の意識作用あるいは思考作用から派生した対象であり，物質でないことはもとより単なる主観的な存在でもない。認識の成果を伝達するにも，文学作品においても，その基本的単位となるのは文法にのっとった文章である。それに作品に語が単独に孤立して登場することはない。「一語文」と言われるものも，厳密には単語とは言えないし，「文」として文脈のなかに位置づけられている。文章も単語と同様に音声面と意味とに区別することができる。だが，語音のように統一した音声形態としての「文章音」というものは成立しない。文章が統一単位になりうるのは，文章の意味の統一性にもとづいている。文章の意味内実とは，インガルデンによると「複数の語義のなかで，ひとつの完結した全体として組成される機能的一志向的意味単位（Sinneinheit）」（S. 111）である。

「車が通り過ぎる」という文において「車」と「通り過ぎる」という語は単に並置されているだけではない。「車」という名辞は，その方向要因によって対象に向かうことにより，その対象を命名している。方向要因が対象を指示するには，この対象が質料的形象的内容によって規定され，存在するなら実在する個物として「樹立」されなくてはならない。しかし，文の要素となった語は命名するだけではなく，統語上のなんらかの機能を帯びている。ここでは文の主語となり，それが果す活動の主体として，あるいは「その車は白い」という文なら，それに帰せられる徴表の担い手としての役割が与えられる。主語としての名辞は命名された対象を，こうした担い手としての役

割を果すように準備する。対象は何らかの動詞的表現を待ちかまえていると言ってよい。また「通り過ぎる」という表現も，それだけ見ると，ひとつの活動を展開し，その動詞的方向要因によって，何らかの活動主体を遡示している。しかし文肢としての定動詞は対象を捜すだけでなく，ここではすでにその活動主体を見い出していることになる。名辞によって命名された対象は，動詞の方向要因の終点として役立ち，逆に定動詞によって展開される活動はこの対象のうちに足場を見い出す。比喩的に言えば，相互に待望し合っている機能が果されることで，この文の意味内実の統一が生れる。「車」の代りに「そして」という機能語を入れたとき，「そして通り過ぎる」という文では動詞的方向要因は活動主体を求め続けて，この文は完結しない。

さてそれぞれ相手を支えつつ自己を実現しながら，文全体の機能が発揮される。文全体の機能とは，純粋な名辞および動詞の機能を超えた，両者の総合にもとづく文全体に固有な機能である。したがって文章が叙述するのは，名辞に対応する対象でも，また純然たる動詞に対応する「挙動」でもない。インガルデンはそれを，フッサールなどにならって「事態」(Sachverhalt) と名づける (S. 120)。「車が通り過ぎる」という文の志向的相関者は「通り過ぎる車」という複合名辞のそれとは異なっている。そこでは対象が，自らに帰せられる徴表をすでに備えたものとして外側から捉えられている。また「車が通り過ぎること」としても対象化されずに，ここでは動詞的契機が優先していると言ってよいだろう。

この文章によって「創られ」展開される事態は，先ほど述べたことで言えば，文の意味内実に対して構造的に超越している。それにもかかわらず，本質的には意味内実に帰属している。というのは，この志向的事態はその存立において，文ないしは文の意味内実に依存し，自らの存在基盤を文に見い出しているからである。文がなければ展開される事態もなく，逆に展開される文章相関者がなければ，意味統一単位としての文章も存在しない関係にある。この点は，ここでの肯定文に限らず「願望文」「命令文」「疑問文」にお

いても同様で，これらの志向的相関者の存在性格は異なるが，事態の名辞的動詞的展開であることにちがいはない。

基本的単位である文章のはたらきは，事態を名辞的一動詞的に展開すること，つまり叙述機能を果すことだけではない。機能の面から文章の種類として，叙述文に「告知文」「喚起文」という分類もなされている。これらも文の意味作用にちがいないが，ここでは省略したい。すべての文が「告知機能」や「喚起機能」を発揮するのではないからである。「彼の車が走っている」という文では，たしかに純然たる叙述だけでなく別の機能も含まれている。だが文が必ず誰かに向けられて発せられるわけでもなく，また話者の感情的質などを告知しない文もある。それに比べて，叙述機能を発揮しない文は存在しない。

文は文学作品のなかでも，機能語の統辞上の様々なはたらきによって，多様な構造を示している。そして文相互にも様々に関連し合っている。それと共に志向的相関者である事態も多様な関連のなかにおかれる。とはいえ，文章が基本的な意味統一単位であることから，事態は相互に結びつき合っているにもかかわらず，それぞれの統一をとどめている。また文章はひとつひとつ継起する順序にしたがっており，ある対象を描出する際にも，時間的隔たりをもって事態を創立していくことになる。ひとつひとつの事態は代名詞や機能語によって，結接点をもった網目のように対象を叙述することになるが，関連していても多様な事態に分散している。記号によらずに，現実の事象を捉える際にも，どこを主題的に注視するかによって，統一的全体を成す現実から，ひとつの事態が志向的に引き出されることがある。そこに事象全体からのひとつの事態の分離が生ずる。他の部分は視野の外におかれるが，ここではある事態から他の事態へと，たえず流動的に移行することができ，事象そのものを成す，一切が共生している具体的で完結した領域へ進入することができる。ところが作品世界では，文章の意味内実によって「樹立」される事態だけであり，対象の領域は事態全体のもつ拡がりに等しく，すべて

の点にわたって合体したり融合したりすることはない。

4.

これまで述べてきたように，単語や文全体を特徴づけるのは意味作用である。インガルデンが文に見い出している意味作用，つまり意識作用によって賦与された志向性は，しかしこれにとどまらない。叙述文が実際に用いられるときには，文章作成者の意図によってさらに別の志向契機を帯びる。「彼の車が走っている」という文が，例えば文法のテキストの例文に載っている場合と，実際に車が走っているのを見て相手に話しかけたときとでは，文の内容は全く同じように見えるにもかかわらず，どこか両者は異なっている。文の意味内実は同一であり，叙述される志向的事態も全く同一である。しかし一方は実在する現実の事態に「ついて」述べられ，志向的事態はそれと関係づけられているが，前者にはそのような意図ははたらいていない。文法のテキストの例文を読んで，誰もそれが現実のことを述べたとは思わないし，その文が現実の事態を言い当てているかどうかを問おうとはしない。

われわれは通常，認識したことを叙述文で表わすが，そのとき叙述文は主張文と呼ばれる。インガルデンは論理学的な意味でそれを「判断文」と名づける。文章を書く行為のほとんどは広い意味に取って認識と関わっており，それは判断として表現される。ただし判断されるのは実在する現実のこともあれば，人間の心理現象や数学の論文のように理念的対象ということもある。したがって文に関係づけられるのは実在する事物とは限らず，理念的対象ということもある。この判断文には日常の会話から実在する事象に「ついて」報告する新聞記事，経済学等々の学術論文の文章も含まれる。インガルデンはこれらの文章には，純然たる叙述文の機能，つまり純粋志向的相関者を展開する機能の他に，当該の事態に関係づけ対応させる機能が，つまり主張機能（ラッセルの assertion）が賦与されていると言うのである（S. 197）。

そこで，単なる叙述文とこうした主張文ないしは判断文の相違は次のよう

に説明される。「彼の車が走っている」という文が主張文として登場するときには，「彼の車」の方向要因は名辞に内属する純粋志向的対象にとどまらずに，現に見ている実在する自動車（それが荷車でなく，自動車であれば）に向かう。方向要因のこうした指示によって，文の意味内実が展開する事態全体も実在する客観的事態に関係づけられる。文相関者の実在的領野へのこの志向的転移と同時に，動詞はその動詞的展開の他に，文相関者が（この場合には）実在世界で可能存在としてではなく，実際に存立するものとして，つまり「……である」だけでなく「……がある」「……がいる」として措定する。文が真であるのか偽であるのか，判断は現実の事態を言い当てていること，それとの合致を求めているが，こうした「真理要求」を文が果せるのは，この二つの機能にもとづいている。そして合致しているとき，その文は「真」という徴表を与えられる。

このように文相関者が現実の事態に関係づけられ対応するのは，認識の成果にもとづく判断において，両者の内実が適合し同一視できるという思念がはたらいているからであろう。その思念が文に賦与されており，文相関者の実在的領野への転移も求められているのだが，両者を対応させるのはすでに聞き手の意識作用ではないかという疑念も浮かぶ。そこは微妙なところで，明確にするには読者なり聞き手の行為を分析しなければならない。また個々の文がこうした機能を帯びているのかどうかは捉えにくいかもしれない。インガルデンは一種の断定記号がついていると考えるのだが，文そのものには顕在的に示されていないからである。文の機能と言っても，それがどこの場で用いられるかによって，いわば文全体の性格によって個々の文に与えられる契機である。ここもケーテ・ハンブルガーをはじめ，いろいろ問題が提示されている点である。ともあれ，文が発せられ，文相関者が実在する事態に重ね合わされるとき，われわれが現実の事態，自動車が走っている事態に注目することはたしかである。その際に，純粋志向的事態そのものは，いわば透明になって際立ってこないことがある。そこからまた，すでに触れたよう

な，文の志向的相関者は存在せず，この文に直接指示され意味されるのは実在する事態だけではないのかという見方が顔を出す。しかし客観的事態と合致して「真」とされる文だけが文の志向的相関者を失ない，「偽」とされる文に文相関者が存在することに説明がつかないだろう。また「あの車」というとき，「あの」とか「この」は全く志向的存在であって，これに対応するような契機を備えた対象は実在世界には存在しない。それは主観的に意味賦与された契機である。実在する客観的事態に重ね合わされるのは，「あの」とか「この」を含めた文の志向的相関者そのものではなく，その内実だけである。文に述べられたことにすぎないという仮構性あるいはこの内実を外から規定する志向的存在性は，その際われわれの視野に入らないのである。ここに純粋志向的対象の二重構造を見てとることができる。

一方，この主張文と対照的な，文法の例文として用いられた「車が走っている」という文においては，対応する現実の事態との関係は全く成り立たない。そこには，二つの事態を同一化して適合させる思念がそもそもはたらいていないのである。したがって，その文相関者は実在的領野へ志向的に転移されることはなく，またそこに実際に存立するとも措定されていない。われわれは，この文を現実の事態についての判断とは読まないだろう。この文の相関者は単に文に述べられたこととして，実在世界に対して完全に「宙に浮かんだ」対象として現われる。この例文が命令文や願望文であっても，実際の場面で発話されたように，文相関者がそれぞれの存在性格をとって実在する領野に転移されることはない。

それでは文学作品に登場する文はどうであろうか。これは純然たる叙述文とも真正な判断文とも言えない。新聞記事でどこそこの建物が焼けたと報道されると，われわれはそれを事実として受けとり，それに対して現実に行動をとることもある。ところが同じ紙面の小説に，かりに同じ文が登場しても，それを現実のこととは思わない。その事態は小説の上のこと，仮構ないしは虚構（フィクション）のことと受けとっている。それでも完全に「宙に

浮かんだ」世界でもなかろう。実名小説の筆禍事件はときどき起る。またリアリズム文学観において，文学は現実の形象的認識と言われるように，文学作品の文章の主張機能ないしは判断機能を無視できない。童話に登場する現実にはありえない対象や起りえない出来事も「昔々あるところに……がありました」と一応現実に実在することと設定され，決して空想のことだとか非現実的な出来事とは述べられていない。歴史小説の場合にはなおのこと，歴史上実在した人物に「ついて」報告しているような外見が与えられている。また語り手が登場し，その物語という体裁をとった枠物語がある。小説の会話文と同じく二重構造になっているが，そこでも描かれた対象である語り手は実在する時空に現存すると定立されており，見てきたような話をわれわれに聞かせてくれるのである。

インガルデンは文学作品の文章（ただし，作品には会話文，また仮定や願望文など様々な文が登場する。ここでは基本的な叙述文）を両者の中間に位置する「擬似判断文」と規定して，作品に即して三つの類型を示してくれている（S. 178 ff.）。それは実在する現実に対する「宙に浮かんだ」虚構性ないしは仮構性の程度を示すことにもなっている。ひとつは，ある公園やある町，つまり地球上のどこかで演じられる状況を扱うとしか指示されていない作品，例えば童話や象徴的作品の類いである。ここでも文相関者は志向契機によって実存的領野に志向的に転移される。奇想天外な出来事も実在世界に現存するものと主張されている。しかし判断文を特徴づける思念，つまり展開される事態が客観的領野に見い出される事態と精確に適合ないしは合致しているという思念は全く欠けており，現実の事態と重なり合うことはない。実在する世界のことだが，どこか宙に浮かんだまま一箇独立の世界を成している。続いては，ある時代に実際にあった個別的事件ではないが，当の時代やその環境において「ありえた」対象や「起りうる」事態という一般的典型を描いた，例えばトーマス・マンの『魔の山』のような作品である。そこでは先のように，客観的事態に適合しているという思念は欠けていない。ある

人物なりが，一般的類型に適合することによって，志向的事態は実在界に移される。ときには「スイスのタヴォス」と個別的対象が樹立されることで，客観的世界と関係づけられることもある。こうして実在性を喚起し，あたかも実在することのように描き出されている。しかし名辞的語義の方向要因は決して文の志向的相関者を超えて，特定の実在する対象を指示することはできず，またその文は実在する事態との合致を求めて「真理要求」をかかげてはいない。最後のタイプは，現実に実在するあるいは実在する個別的人物や出来事に「ついて」できるだけ忠実に描写した歴史小説などである。これは学術論文の歴史記述と境を接している。ただし両者の相違は小説にはフィクションが混入し，事実から逸脱しているところがあるという点ではない。学術書の戦闘場面の歴史記述においても，完全に忠実な描写は，文そのものによる限り本質上果せないからである。また「鬼がいた」という文も，その実在が信じられていた時代には，ひとつの現実判断として提示されており，そこに虚構の，想像上の対象が出現するかどうかではない。現実の事態を言い当てることができない「偽」文とは，文学作品の文章は別ものである。

歴史小説や自らの体験した「真実」を表現したとする小説においても，実在する事態に「ついて」描き出された文相関者は，同じであるかのように適合される。だがここでも二つの事態は同一化されない。そこに登場する文が「真」であるか「偽」であるかの真理要求は保留されているからである。ただその境は流動的である。「ノンフィクション」が文学に位置づけられるにしても，それがもし過ぎ去った現実そのものの判断として書かれているなら，志向的事態そのものは視野から消える。それは文学作品から記録文書に位置づけられ，それがもつ価値も異なってこよう。ただし志向的文相関者が，非現実であるとはいえ，もうひとつの「現実」のごとくに立ち現われてくるのは，ここでの志向契機だけではなく情景などの他の要素にもとづいており，文学とその他の著作を区別するのは叙述文のこうした変容だけではない。こうした変容，つまり文学作品の文章の擬似判断の性格が生ずるのは，

現実以上に現実らしい世界を現象させんがためである。そして本当らしく人を欺く「嘘」の文は文学作品の文に近い。

*
**

最後に，本稿ではインガルデンの見解を追って，言語（単語と文）の意味と意味される対象，そして「言語の館」の志向的存在性を問題にしてきたが，これを彼の存在論全体から見るとき，実在的世界と理念的世界という，共に存在自律的な二つの存在分野に接点をもちながら，それらとは別の存在様式をとる志向的つまり意味世界という領野を確保することが本書の狙いであったことを指摘しておきたい。そこには芸術作品や学術論文だけでなく，法律や制度も属している。また共同主観的語義の同一性については，対応する事物を直示して確認すること，語義が理念の顕在化であると暗示するにとどめたが，これも今扱うことはできない。

文中での引用および参考にしたインガルデンの著作は次のとおりである。

- Bemerkungen zum Problem Idealismus-Realismus. Halle 1929.
- Das literarische Kunstwerk. Eine Untersuchung aus dem Grenzgebiet der Ontologie, Logik und Literarische Kunstwerk. Halle 1931.
- Das literarische Kunstwerk（文中の引用はこの第4版）. Tübingen 1972.
- Der Streit um die Existenz der Welt.
  Existenzontologie I. Tübingen 1964.
  Formalontologie II/1. Tübingen 1965.
  Formalontologie II/2. Tübingen 1965.
- Vom Erkennen des literarischen Kunstwerk. Tübingen 1968.
- Gegenstand und Aufgaben der Literaturwissenschaft. Tübingen 1968.
- Erlebnis, Kunstwerk und Wert. Tübingen 1969.